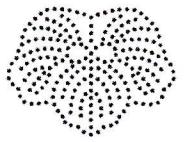


「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に向う。という気持ちでお届けしています。



りゅうま伝

7/号
2025年10月26日
高野竜馬

「息子と鬼滅」

夏休みに観た映画をもう一度観たいと言いつ出した息子と男で「鬼滅の刃」無限城編を観てきた高野です。(私は初鑑賞)

夏休みからロングランするだけあって、アニメながら観たえのある作品でした。

竹間単に言う「鬼退治」の話なのですが、現代社会を映し出した作品なのです。

というのも鬼たちは元々は人間であり、不平不満(絶望や孤独、嫉妬、承認欲求)から鬼になっていくのです。承認欲求に囚われた姿は現代の自己肯定感の低い人間の投影のようになっています。

中でもアカザという鬼が生まれたエピソードは、ホントに涙

もので、横で観た息子からも「お父さんも涙目やったね」と笑われました。

アカザは元々、ハクジという名の人間でした。貧困な家庭に生まれ、病弱な親を看病するために盗みを働いては罰せられる毎日。

親の死後、孤児になるも、ある武道家に引き取られて、武術を磨きます。そしてその武道家の娘と婚約し、やがてこれから幸せになれると思えた矢先に、他の道場の妬みから武道家と娘(婚約者)が毒殺されてしまうのです。ハクジは復讐して回り、その姿を見ていた鬼の親分から見込まれて鬼にされてしまうのです。(そりゃ鬼になるわな、なんて同情もしました。)

一方で炭治郎(主人公)たちは鬼を憎みながらも「もともと人だった」とも知っていて、単に敵を切るのではなく、哀れみをもって戦います。

そのせいか主人公が勝っても何故かスッキリとは喜べません。自分自身の日頃のわがままばかりを考えさせられるからでしょうか。

実はこの映画を観る前のこと。時間に余裕があったのでポップコーンを買おうと並んでいました。ところが、私たちの列の店員さんの仕事があまりに遅く、開演時間が迫っても、ぜんぜん前に進みません。

そこで息子だけ先に映画館に入れて私一人並ぶことに。ずっとこの思いで私が入場した時には映画も始まっていた。イライラ、マックスで身をかかめながら入場すると今度は暗い映画館の中でコーラを

こぼしてしまい、またまた不機嫌に……。映画を観終った時、俺も立派な鬼になれそうだなと妙に反省した次第です。

「不足不満の心は、人を鬼にするんだぞ。相手を思いやる気持ちをおぼろげにするな」と炭治郎に教えられた気がします。

「鬼滅の刃」無限城編は人間性を問い直す現代の寓話として心に残りました。



たかの財形事務所

〒819-0374 福岡市西区千里 707-13

☎090-3407-2123

<https://www.takanozaikai.com> メール fp.takano@gmail.com